
戦妹協定は脅迫ではない

米寿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦妹協定は脅迫ではない

【Nコード】

N9459X

【作者名】

米寿

【あらすじ】

あの理子にこんな戦妹^{アミカ}いたらどうだろう？そんな、戦妹との出会いを戦妹視点で書きました。そしてこれは、妄想から生まれ出た産物です。

練習作ですので温かい目で見ていただけると幸いです。

（前書き）

初めましての方は、初めまして。すでに私の作品を知っている方は、ご無沙汰しております、米寿です。

恥を忍んで久々に筆を取らせて頂きました。

詳しくは活動報告にて、ご報告させていただきますので、この場はご容赦下さい。

このお話は、緋弾のアリアの二次創作になります。一つの物語を最後まで書ききることを念頭に置いたものになっています。

練習作ですので、至らぬ点多々あるかとは思いますが、暇潰しに楽しんで頂ければ幸いです。

やはり人生の先輩の言うことはキチンと聞くべきだった。それが如何に荒唐無稽な内容であつてもだ。

普通空から女の子は降つてこないし、さらに下着姿なんてことは尚更無い。しかも、色は金色だ……いや、まあ、色は関係ないが。

これがフィクションならまさにラブコメ。ボーイ・ミーツ・ガール。恋とドタバタ劇の始まりとして充分な導入になるだろう。

でも、生憎ここは現実で、空から女の子が降つてきて、しかも下着姿。

さらに、その女の子に銃を突きつけられているなんて、おかしいに決まっている。

「くふっ どうして黙つてるのぉ？こんなにカワイイ娘が下着姿で口説いてるのに」

銃を突きつけられているこの状況を口説いているとは言わない。これは、脅迫だ。

「ああゝ。もしかして照れてるのかなぁ？そっか、そっかぁ。それならしよーがないよね！」

そんな訳ない。どこをどう解釈すればそついう結論になるのか、さっぱり分からない。

「そ・れ・と・も・おゝ。」

眩いばかりの金髪をかきあげて、獲物を見るような目付きで、

「ワタシと火遊びしてみる？武・偵・候・補・生・ク・ン？」

殊更樂しげに告げた。

「はあ…。」

どうしてこうなった、なんて言う資格は、今の俺には無いだろうなあ。

+++++

東京近郊に浮かぶ巨大なメガフロート。そこに、武装探偵、通称『武偵』と呼ばれるものを育成する学校がある。

武偵は、今日、増加する犯罪を抑制する為の新しい国家資格だ。そして、武偵には様々な権利が与えられる。例えば銃刀の保持や逮捕権を持つ事が挙げられる。

これだけなら、警察とあまり変わらないように聞こえる。しかし、武偵には警察との大きな違いがある。

警察とは違い、武偵は金で動く。

それは、武偵法と呼ばれる法の範囲内であれば、どんな仕事を選ぶのも自由であるという点。いわば、何でも屋みたいなものだ。力があれば、それだけの報酬を得られる。もちろん、それ相応のリスクは伴う事にはなるのだが…。

「という訳で、午前の授業はお仕舞いです。午後からは、各専門課程での実習になります。皆さん、せいぜい死なない様に頑張ってください。」

そう言って、授業の終わりを告げた教師は教室を後にした。

「死なない様にね…。ここじゃあ、全く冗談に聞こえないよな。

なあ、野々宮？」
のみや

実際、この武偵校では、入学した全員が卒業できる訳じゃない。退学とかの理由だけじゃなく、毎年、訓練やら実習で命を落とす者もいる。

力次第で望む報酬を得られる武偵のリスク、それが命の危険。それは、武偵候補生である俺たちにとっても例外じゃない。

「確かになあ。でも、俺は、アサルト強襲課のしどろ獅童と違ってインケスタ探偵課だから、それほど命の危険は無いけど。ま、頑張れ、獅童。」

武偵校には様々な専門課程があり、それによって身に振りかかる危険度が違う。

獅童が所属している強襲課は特に危険を伴う課で、逆に俺の所属する探偵課はそれほどでもない。

「ちつ。薄情者め。それが三年間、苦楽を共にするルームメイトへの態度かよ。」

「いやいや、Aランク武偵のお前なら大丈夫だろ？」

この武偵校では、入学時に試験でランクを付ける。ランクは大きく分けてS〜Eランクがあり、そして、それがそのまま学内でのステータスになる。その中でも、獅童は上から二番目のAランクで一年生の中でも有数の実力者、という位置付けだ。

「ランクなんて飾りだ。なんのアテにもならねえよ。Cランクってことになってるけど、現にお前は…」

「ま！その話はいいじゃないか。俺はお前の実力を買ってるって

ことで。」

俺は、獅童の言葉に食い気味に言葉を被せた。
そんな俺に、獅童はやれやれと首を振って、肩を竦めた。

「…分かったよ。じゃあ、今日の晩飯、お前の特製オムカレーで手を打とう。」

「今日は軽くパスタですませようかと思ってたけど、しょうがない。分かったよ。それじゃあ、俺は昼を食いに行くから、また、後でな。」

俺はぶるつと身震いしながら、そう言ってヒラヒラと手を振りながら、教室を後にした。

+++++

外は雲一つ無い青空。

俺は屋上で寝転がりながら、お手製のミックスベジタブルサンドを頬張っている。

「いや、絶好のランチ日和だ。」

俺は晴れの日、この場所でよく昼を食べる。滅多に人が来ないし、静かな所が気に入っている。

武偵校は普通の高校と違った意味で騒がしい。そんな騒がしさから、少し遠ざかれる場所。それが、この屋上という訳だ。

「あふつ…。あ、ふああ。」

俺は大あくびをして、んっーと体を伸ばし、そのまま仰向けに倒れ込んだ。視界にうつるのは、青空だけ。

このまま寝てしまうのも悪くないと思い、目を瞑むって、微睡みに身を任せようとした。

その瞬間、後ろでバン！と勢いよく扉が開くれ、一人の男子生徒が転がりこんで来た。

「ハアツ…ハアツ…っ、アリアのヤロウ。ようやく撒けた、か…。つたく、どうして俺が、こんな目に合わなきゃなんないんだ…!!」

俺はそう悪態をつく男子生徒を、仰向けに寝転んだまま、首を傾けてぼっーと見ていた。

どこかで見た覚えがあるんだけど、思い出せないな。

「こうなったら、意地でも逃げ切って…って、ん？」

どうやら、あちらもこちらに気が付いたみたいだ。なら、不躰に眺めているのは失礼だ。それに、この人の焦りようとさっきの悪態から察するに、厄介事の匂いがプンプンする。早々に立ち去るほうが懸命だ。

そう思い、体を起こして手早くミックスベジタブルサンドを入れてあった容器を片付けようとした時、男子生徒は俺に声をかけてきた。

「昼のとき、騒がしくしてすまなかった。だが、こっちにも事情があつてな、許してくれると助かる。」

「別にいいですよ。それに、この学校だと騒がしくない、なんて

ほうが珍しいじゃないですか？」

何せ日常生活で銃を撃ったり、武器を振り回す学校だ。騒がしくない訳がない。

「それもそうだな。」

と言って、男子生徒は苦笑いした。

「じゃあ、俺はこれで。」

容器を片付け終わった俺は、男子生徒の横を通り抜け、教室へと戻ろうとした。

その時、

「待て!!!」

と言う鬼気迫る声に、足を止めざるを得なかった。

さらに、

「……………今、ここから出るのは危険だ。」

と続く尋常じゃない真剣な忠告に思わず、

「一体どういう事ですか？」

そう聞き返さざるを得なかった。

＋＋＋

「俺は二年の遠山キンジだ。お前は？」

「一年の野々宮静男です。」

非常に簡単な自己紹介を終えた俺は、先輩にさっきの事を聞くことにした。

「それで、先輩。」

「ん？」

「さっきのは一体どういう意味なんですか？今、ここから出ると危険だって言っていましたよね？」

「…ああ。簡単に説明すると、俺はSランク武偵に追われてるんだ。あ！勘違いするなよ、俺は何もやってないからな！」

何もやってないのにSランク武偵から追われる、なんてことはないと思うんだが…。

でも、それなら追われているのは、遠山先輩であって俺に危険が及ぶとは考え難い。

「まあ、分かりました。けど、それなら、俺が今ここを出ていくのは危険だということは無いんじゃない？」

「武偵憲章一条。」

俺の言葉を食い気味に、遠山先輩はそう言った。
武偵憲章一条？それは確か、

「仲間を信じ、仲間を助けよ、だ。」

そう。武偵校憲章一条、仲間を信じ、仲間を助けよ。もちろん他にも憲章があつて、武偵になる上で忘れてはいけない心構えなんだそうだ。

なら、俺も武偵を目指してこの学校に来たわけだから、それは守らなくちゃいけないと、遠山先輩は言いたいのだろう。

「顔も名前も知ってる、そんな『仲間』を見捨てる武偵はいないよな？すまないが協力してくれ。」

つまり、あれだ、俺は嵌められたという訳だ。

静かなランチタイム後のお昼寝タイムが、Sランク武偵とのサバイバルタイムに早変わり。

トコトンついてない。獅童との『あのやり取り』の後は決まってこうなるのだから、余計に始末が悪い。なら、さつさと覚悟を決めた方が、俺の精神衛生上いいに決まってる。

「はあ…分かりましたよ…。で、先輩は誰に追われるんですか？」

「アリアだ。神崎・H・アリア。」

「！！！！」

オイオイオイ！よりによってその人かよ。

あの獅童ですら、全く勝てる気がしなねえって言ってた、まさに本物。

二振りの剣と二丁の拳銃で闘う事からついた二つ名は、双剣双銃カドラのアリア。

無理だろ、これは。どう考えてもミンチコースしか頭に浮かばない。なら、俺が取るべき答えは決まっている。

「先輩、短い間でしたが、今までお世話になりました。俺は、今日この日、武偵になることをあきらめます。ありがとうございます。また！」

「オイ！待て！話は最後まで聞けっ！」

「そうはいってもですね、先輩。どう考えても助からないじゃないですか？」

それだけ神崎先輩は強い。それも圧倒的にだ。逃げ切るなんてまず無理だろう。

いや、待てよ。今の状況を打開する方法は、ある。

「先輩、ひとつ聞いてもいいですか？」

「なんだよ？」

「先輩は神崎先輩に追われているんですよね？」

「…まあな。で、今それが何の関係があるんだ？」

「なら、俺が神崎先輩にこの場所を教えます。そうすれば、神崎先輩は遠山先輩を捕縛できる。Sランク武偵は狙った犯罪者は逃さない。それで俺は晴れて自由の身に！」

「待て待て待てっ！だから、話は最後まで聞けって言ってるだろっ！……！」

まあ、冗談はこのぐらいにしておくか。

やだなあ、いいアイデアなんて事は、これっぽちも思っていない。思っていない。思っていない。思っていない。

「分かりましたよ。それで、話っていうのはなんですか？」

遠山先輩は気を取り直した様子で話始めた。

「ああ。それはな、アリアはこの場所をまだ突き止められていないってことだ。『あるモノ』を使って、完全に撒いてきた。そして、ここは穴場だ。来たばかりのアリアはまだ、完全に校内を把握できてるとは考えづらい。だから、ここに到達するルートを知らせるわけにはいかないんだ。」

いや、Sランクの武偵がそんな基本的な部分を疎かにしてるとは思えない。

地理の把握は基本中の基本。…ま、いつか！俺にはそこまで関係ないし。

「なるほど、それでここから迂闊に出られて、経路を知られたくないと。」

「そうだ。分かってくれたか。」

大きく息を吐いて遠山先輩は脱力し、その場に腰を降ろした。

きつと、追われていた時から続いていた緊張の糸が切れたんだろ
う。

確かにSランクの武偵に、ましてや神崎先輩に追われるなんて、
生きた心地がしないだろう。

「すまないな。でも、次の時間からはクエストに出られる。それ
までの間だけ、ここで匿ってくれればいい。」

「いいですよ。乗りかかった船ですし、仲間を売るなんて事、武
偵を目指す者として出来るわけじゃないですか。」

「ちつ……。さっきは売る気マンマンだったじゃねえか。全く都
合のいい後輩だぜ。」

「あつはっは!」

「あつはっは!じゃねえよ!」

呆れた様にそう言う先輩に、俺は快活に笑い返した。

+++++

俺と先輩は屋上のフェンスに身を預けながら、空を見上げていた。
授業が始まるまで、まだ時間がある。それまで、ここでぼーと
しているのも悪くないだろう。

「なあ?」

そんなとりとめもないことを考えていたところ、先輩が俺に話か
けてきた。

「空から女の子が降ってくると思うか？」

「は？」

質問の意味不明さに、俺はそう返すことしかできなかった。

「だから、空から女の子が降ってくると思うかって聞いてるんだが？」

「いやいや先輩。わざわざ二回言わなくてもいいんですけど。」

俺は聞いていなかったんじゃないかって、単純に意味がわからなかっただけなんです。

しかも先輩の表情から察するに、冗談じゃなくて本気で言ってるみたいだ。なら、本気で返すのが筋ってもん。

「いや、普通は降ってこないと思いますけど。」

「だよなあ。はあ~~~~~。」

先輩は、大きなため息をついて、心底疲れた表情で肩を落とした。なんか先輩、急激にやつれていつてる気がするな。なんか、あったんだろうか？

「いいか、後輩。ここから先は、先輩としての忠告だ。ちゃんと聞いておけよ。」

「はあ……。なんですか？」

「もし、空から女の子が降ってきたとしたら、例え自分がどんな危機的状况にあっても関わっちゃいけない。それが、仮に命の危険であったとしてもだ。関わったが最後、四六時中付きまとわれ、世界の果てまで追い回され、そして望まぬ厄介事を背負わされる。……待っているのは、地獄……で、奪われるのは、自由だ。」

なんか話が芯に迫ってる上に凄く重い……！

察しはつくが神崎先輩、アナタ、一体、遠山先輩に何をさせてるんだ！？どうやったら、こんな疲れきった状態になる！？

「いいか？空から女の子が降ってきたとしたら、兎に角逃げるんだ。分かった——「キンジツ——！！！！」「げっ！？」

けたたましく扉を開く音がし、遠山先輩の言葉を遮る声が響き渡った。

声のもとへと振り返ると、そこには桃色に輝くブロンドの髪を二つに結った美少女の姿。

神崎・H・アリア。

この武偵校が誇るSランク武偵。そして、彼女は今まで一度も『犯罪者』を取り逃がしたことは無い。

「キンジツ……。どうしてワタシから逃げるのかしらあー。」

神崎先輩は、人間離れた空気を感じながら、ユラユラと距離を詰めてくる。怖っ！

これは、遠山先輩でなくても命の危険を感じて逃げ出したくなるレベルだ。

「そ、それは……だなあ……。って、そんなことよりっ！どうしてここが分かったっ！？」

「そんなの決まってるじゃない。ワタシを誰だと思っているのよ！神崎・H・アリアだからに決まってるじゃない！」

「はあ~~~~。」

なんだろうこのやり取りは。深くため息をつく遠山先輩の気持ち、分からないこともない。言っていることが無茶苦茶だ。獅童の言う通り、これは全く勝てる気がしない。もちろん二つの意味で。

「お呼びみたいですよ、先輩？」

「そうみたいだな。」

逃げられない事を悟ったのか、遠山先輩はガツクリと肩を落としました。

そんな様子を満足気に眺めていた神崎先輩の瞳が俺を捉えた。

「誰？」

「偶然会った後輩だ。」

「ふん。ま、いいわ！さっさと行くわよっ！」

俺にあっさり興味を無くした神崎先輩は、身を翻してドアへ向けて歩き出した。

遠山先輩は、それにやれやれといった様子で付いていく。そして去り際、遠山先輩が俺に耳打ちしていった。

「こうなりたくなかったら、今日の忠告を忘れるなよ、後輩。」

ポンと肩を叩き、後ろ向きにヒラヒラ片手を振って、遠山先輩は神崎先輩と一緒に去って行った。

＋＋＋＋

そして、時間は今へと戻る。長々と回想してきたが、結局のところ、俺は先輩の忠告を聞かなかった。

だから、空から降ってきた下着姿の女の子に銃を突き付けられるなんて、そんなありえない状態に置かれている。

俺はただ、今日の夕飯のオムカレの材料を買いに来ただけのはずなのに。

「ため息だけ吐いてダンマリ。そんなに無視するとがおーだぞ」

銃を持っていない手で、頭に角を作って威嚇してくる。はあ…、遠山先輩の言った通りだ。空から降ってくる女の子に関わると、ろくな事にならない。

「それで、アンタは一体俺をどうしたいんだ？」

「…………ふん。そーいう態度なんだあ？ねえ？今の状況分かってそう言ってるの？」

その言葉に、首の後ろがチリチリする。目の前から殺気が膨らむのが分かる。

そして、同時に悟る。目の前にいる女の子の力量と脅威度を。けど、まだ足りない。『それだけ』じゃ、まだ足りない。だから、

俺は、

「下着姿の痴女に銃を突き付けられた、哀れな武偵校生、だろ？」

そう言つて、目の前の『敵』をこれ以上ないくらいに挑発した。

「バン」

「ぐっ！」

敵からの返事は、そんなマヌケな声と同時に足へ放たれた一発の弾丸だった。

防弾制服だから良かったものの、そうじゃなければ足がイッてるところだ。

まあ、向こうも分かつててやったんだろうが、あまりに躊躇が無さすぎる。と言うより慣れてやがる。

「言つたよね。がおー だぞつて。くふつ。」

「っ！ 痛え……。」

冷静に考える、状況はこうだ。

敵の強さは俺より上で、攻撃によつて足を負傷し、機動力を奪われた。

そして敵は未だに銃を所持しかつ俺の挑発で興奮状態。最悪も最悪。完全に命の危機つてやつだ。

「……………ふふつ。」

そんな状況にも係わらず思わず笑みがこぼれる。

けど、それでいい。俺の中の何かが切り替わるのが分かる。
今まで見ていなかったものが見える様になる。急速に視界がクリ
アになる。

生き残る為の道筋が、今の俺には、ハッキリと見える。

「なぐに笑ってるのお。オシオキが足らなかったかな」

「……………その銃う。」

「ん？」

「もう、弾、入ってないんだろあ？」

「……………何を言ってるのかなあ。」

平静を装ってるけど、焦っているのが、丸分かりだぜえ。
だから、容赦しねえ。畳み掛けるさあ。

「なぐら、撃ってみろよお。やれるもんならなあ？」

膝について見上げる俺と、下着姿の敵の視線が交錯する。

端から見れば敵の格好も相まって、あんまりな光景だ。

男女二人なのに、ロマンチックな雰囲気は欠片もない。あるのは、
そう、硝煙と闘いの匂いだけだ。

「くふっ！ふふ。ふふふっ！！……………なあんだ、ちょっとは食べ
ごたえありそう。……………後悔、すんなよお？クソガキイ！！！」

敵の下着と同じ色の髪が、生き物の様に動き出すと同時に、鋭い
膝蹴りが俺の顔面を捉えようとする。

「こんな時にも、下着の色の方が気になっちまうなんてなあ！！」

そう言いながら、仰向けに体を倒し、買い物袋を掴み、蹴りかわし、両手を使って、敵の下を潜り抜ける。

「なっ！？」

背後を取ると同時に跳ね起きる。

俺の体勢は整い、敵は虚をつかれ、体勢が崩れている。
その絶好のチャンスに俺は、

「ローアングルのサービスありがとなあ！！」

その言葉を残し、背を向け、トップスピードで駆け出した。
つまり、敵前逃亡。それも、全力で。

「はあああ！？」

呆気にとられた敵を置き去りにして、俺はグングン加速する。
後ろで何か言ってるが無視だ。

それにしても、昔の人は本当にいい言葉を残した。この状況にピッタリの言葉だ。

「逃げるが勝ちって…っ！！」

背後に感じた悪寒に、手にした買い物袋を掲げた。そこには、二本のナイフが突き刺さっていた。

「…………おつかねえ。どんだけ、執念深いんだよお。なら、もう一段あげてくたしますかあ！」

走る足に力を込める。それに俺の足が応える。

俺は夜の街を、お腹を空かせるルームメイトが待つ男子寮へと風の様に駆け抜けた。

+++++

あゝあ。逃げてる時にぐちゃぐちゃになった卵を買い直したら、すっかり遅くなった。

「ただいま。」

「おう、お帰り〜…って、ああ、いつも通りか。まったく待ちくたびれたぜ。」

「悪い悪い。今から用意するから勘弁してくれよ。」

このやり取りもいつも通り。

そんないつも通りのやり取りを終え、キッチンに入り、材料を吟味する。

俺も今日は腹が減ってるし、ガッツリいくとしますか！

キッチンで意気込む俺に、獅童が顔だけ出して声をかけてきた。

「んで、今回はどんなだっただ？」

「ん？ああ、今回は下着姿の美少女と追いかけてこしてきた。しかも、色は金だ。」

「いや、色とか聞いてねーから。しっかし、相変わらずワケわからんことに巻き込まれるな、お前。」

「半分はお前のせいなんだが。そこんとこちゃんと分かってる？」

料理する手を止めずにジト目を向けるが、獅童は素知らぬ顔をした。

コイツ、全く反省してねーな。

「そんな事より早くしてくれよ。腹が減って死にそうだ。」

挙げ句の果てにこんな事を言う始末だ。

まあ、腹が減って死にそうってのには俺も同感だ。

カレーも一晩寝かせてあるし、文句を言う前にさっさと作るか。

「んじゃ、皿とスプーン。それから飲み物の用意してくれ。カレー温め終わったら、すぐだ。」

「よしきた！それなら得意だ！任せとけ！」

「ハイハイ。」

調子のいいルームメイトに呆れながらも、俺の料理する手はいつも以上に軽快だった。

+++++

「いやゝ食った、食ったゝ。ごっそさん！」

「お粗末様でした。」

一段落して食器を下げ終えた俺を、獅童がソファに寝転びながら豪快に迎えた。

そして、俺が戻って来たと同時に寝転んだまま、体をこっちに向けた。

「けどよ、野々宮？」

「ん？」

「いつも通りとはいえ、今回はえらく遅かったじゃねえか。」

「まあな。」

「で、どんな奴が相手だったんだよ？」

「だからさっき言っただろ？金色の下着姿の美少女だよ。」

「…………はぐらかすな。マジで聞いてんだ。」

獅童が怖い顔で睨む。俺だってちゃんと分かってる。コイツは本気で俺を心配してくれてる。

あんまり心配かけなくなかったが、これは、ちゃんと話しくべきだな。

「分かったよ、悪かった。そんな面白い話じゃないし長くなるけど、いいか？」

「おう！」

獅童は、ニカッと笑って満足気に頷いた。

全く…かなわないな、コイツには。

「そんじゃ。聞いてもらうとしますか。」

そして俺は、さっきまでの出来事を話始めた。

買い物帰りに突然空から女の子が降ってきた事。

その女が何故か下着姿だった事。

どうやら訳ありだったらしく、出会うなりいきなり銃を突きつけられた事。

そこでやむなく『アレ』を使って逃走をした事。

そして、やはり、下着姿が素晴らしかったのを隠す事なく話した。獅童はそれを目を瞑って黙って聞いていた。

「下着の話はどうでもいいとしてだ。」

話を聞き終わった獅童の第一声に俺は、非常に落胆した。

コイツ、男のロマンをどうでもいいの一言で切り捨てやがったよ。ここはこっちよ、俺がガツンと言ってやらなきゃな。

「おい、待てよ。そこが一番重要だろう?」

「舐めてんのかなあ!野々宮クウウン!!!」

「すいませんでした。」

床に額を擦り付けて誠心誠意謝る。

悪い事をしたと思ったたらキチンと謝る。それはとても大事なことだと思う。

「ちつ。まあいい。けど『アレ』を使っただってことはお前、撃た

せたんだろ？」

「ああ、足だ。まあ、防弾制服だったから心配はいらないけどな。」

「プラプラと足を振って無事をアピールする。」

「大丈夫ならいいけどよ。しかし、結構な相手だったってことだな、その痴女。」

痴女って…。まあ、あの女の言動といい、確かに否定はこれっぽちも出来る要素は無いが。」

「けど、お前がアレを使うってのはそれだけヤバいってことだろ！？お前をその状態にしたことがある俺が言うのもなんだけどよ、ダチの身にもなってみやがれてんだ！」

「すまん。」

獅童が言ってる事は最もだ。だから、謝ることしかできない。けど、こればかりは俺にもどうしようもない事だ。」

「いや、俺こそすまなかった。熱くなりすぎたわ。けど、ホントお前は厄介な力を抱えてるよな。」

「まあな。けど、しょうがない。」

そう、俺は厄介な力を持って生まれてきた。いや、力というのは正確な表現じゃない。」

俺の家である野々宮は、代々、ある特徴を持ってこの世に生を受

ける。

それは、強烈なまでの『生存本能』。

野生の動物は生き残る為にこの能力が人間より発達していると言われている。人間の社会と違い、野生は弱肉強食。生き残るには、その術を獲得しなければならない。

どういう理由か知らないが、人間社会で普通は淘汰されるはずだった野生の結晶が、野々宮の血には宿っている。

家族によって、発揮される生存本能は違う。

俺の場合は、相手が自分より強ければ強い程、さらに、自分が危険な状態であればある程、限りなく強くなっていくという、マゾな感涙ものの力だ。

だが、あいにく俺はマゾじゃないから困ったものだ。

「生まれ持ったもんだから、文句を言うなんてこれまで育ててくれた両親に失礼だろ？だから、しょうがないのさ。」

「まあ、お前がそういうなら別にいいけどよ。あーっ！でも、やっぱり納得いかねー！！」

俺はそういいながら頭をバリバリとかきむしる獅童を眺めていた。会ったばかりの頃は、あんなに噛み付いてきたのに、今じゃすっかり俺の大事な戦友^{タチ}だ。

「いくら考えてもラチが開から寝るわ。……お前もちゃんと休めよ。おやすみ。」

獅童は、こちらに顔を向けずにのっそり起き上がり、そう言い残してリビングを後にした。

「あいよ。おやすみ。」

俺は照れてぶっくらぼうに去っていく戦友の背中にそう返した。
返ってきたのはフンツという荒い鼻息だった。

+++++

あれから暫く、俺にとって平穏な日々が続いた。まあ、武偵校での生活を平穏と言えるかは疑問だが。

後、俺には直接関係ないが、俺が痴女に襲撃されたその日、武偵校の生徒がハイジャック事件に巻き込まれていたらしい。

なんの因果か知らないが、色んな意味でその日はきっと厄日のようなものだったんだろう。

「ま、今となつてはどうでもいいけどな。」

そして、俺は屋上でのランチタイムを終え、絶賛お昼寝タイム中。あれから屋上では誰とも会っていない。追われている先輩も追ってくる先輩もやってはこない。

閉じた瞼には太陽の光が感じられる。今日の空には太陽を遮る雲が無い事は、ランチタイムの時に確認済みだ。

「しかし、鍋パーティーなんて、獅童もいきなり過ぎだ。…まあ、別にいいんだけど。」

なんでも強襲課で意気投合した女の子と、その戦妹^{アミカ}を誘ったらしい。戦妹というのは、武偵校にある特殊なシステムで、簡単に言えば、下級生が上級生に師事を仰げるというものだ。

下級生は上級生から色々な技術を学び、上級生は下級生を教える事で指導力を磨く。相互に高めあう事を目的とした契約だ。

「しかも、獅童のヤツ誰が来るかは来てからの楽しみとか言ってるし。」

果てしなく嫌な予感がする。獅童が夕食をリクエストした時は、決まって俺が災難に巻き込まれるのが定番だ。

そして、獅童に今日の事を聞いた瞬間、俺は武偵校に入学して以来、最大級の悪寒を体験した。

だから、何事も無く鍋パーティーまで過ごせるなんて、毛ほども思っていない。

その証拠に、今朝その話を聞いてから、俺の背中に絶えず悪寒が走り続けている。

「虫の知らせってやつなのかな。」

まあいいや、次の授業まで、ゆっくり眠ろう。嫌な事は手っ取り早く忘れてしまおう方がいい。

そう思った矢先、俺の瞼に影が射した。

今日の天気は快晴。雲一つ無い青空が広がっていて、太陽を遮るものは空に無い。

そして、現在、俺の背中を駆け巡る悪寒は最高潮に達している。導きだせる答えは一つ。俺はいつだって、自分の抱えるジンクスから逃れられないってことだ。

「くふっ、よく見つけた。」

「わあ、見つかったやつって言えば満足ですか？」

そう皮肉り、目を開いた先には、あの日と同じ金色。そんなハッピーな光景を目の前にしても、俺の気分は、今の快晴と違い、一向に晴れない。むしろ、どしゃ降りだ。

「せっかくサービスしてあげてるのにつれないな、後輩クン。」

「恥じらいの無い女性はどうかと思いますよ、先輩サン。」

「まったくも。スナオじゃないんだから 後輩クン、マジ、ツンデレ。」

「ハイハイソウデスネー。ツンデレ、ツンデレ。」

「そう言いながらも、私のパンツから目をそらさない後輩クンであつた、マル。」

そう言われて、自分の体勢を思い出す。痴女相手にこれ以上の不名誉を更新するわけにはいけないので、俺は体を起こし、痴女へと向き直った。

「わざわざ、屋上くんだりまでご苦労様です。一体何の用ですか？」

どうせ、トラブルが舞い込んでくるんだから、直球で聞いたほうがいい。

それが、これまで幾多のトラブルに巻き込まれてきた俺の経験から出た答えだ。

「そんなことよりまずは自己紹介でしょ？礼儀がなってないぞ、後輩クン。」

痴女がかわいくウィンクしながら、めっという表情をした。驚いた。痴女に礼儀を説かれるとは。俺の人生において一度ある

が無いかの経験になるだろう。

二度目があつて欲しいとは、これっぽっちも思わないが。

「……………。一年の野々宮静男です。」

痴女の言いなりになるのは癪だが、話が進まなくなりそうなりそうなので、とりあえず折れることにした。

「やれば出来るじゃ〜ん。アタシは理子。二年の峰^{みなみ}理子だよ。理子って呼んでね。」

「で、一体何の用ですか、峰先輩？」

「あれ〜？聞こえなかったのかなあ？理子って呼んでねって言つたはずんだけどお？」

「……………。で、一体何の用ですか？理子先輩。」

痴女からの殺気が膨れ上がったので、やむを得ず呼び名を訂正する。

「というか、銃に手をかけるな。完全に殺る気満々じゃないか。」

「ほーんと素直じゃないよね、『ののん』は。理子とあーんなに激しい夜を過ごしたっていうのに。」

「変なアダ名をつけないでもらえますか？後、一体何の用ですか？」

「えー。かわいいじゃん？『ののん』って。」

某配管工兄弟奮闘紀に出てくる亀みたいなアダ名、却下に決まってる。そして、二度目の質問も華麗にスルーだ。俺はジトツとした目を痴女先輩へと無言で向けた。

「そんなにアツイ視線を送らなくても理子お、ちゃんとか分かってるから。」

シナを作って体をくねらせる痴女先輩を見て、おれは次に出てくるであろう言葉を悟った。

「のののんから理子先輩に質問です。今日は一体何のご用でしょうか？」

アダ名がコレ以上に悪化するくらいなら、先手を打ってさっさと話を進めたほうがいい。

「ふうん…。ま、いつか。それじゃ、のののんが聞きたくて聞きたくてしかたなかった、今日理子がここに来た理由を発表したいと思いまーす 重大発表だから聞き逃さないよーに！」

ビシッと指を突き付けられた俺の背中に、今日一番の悪寒が走った。叶わぬと分かっているけど、痴女先輩の重大発表を聞かずにこのまま逃げてしまいたい。

「本日、のののんは理子の戦妹になることが決定致しました」「お断りします。」「ってええっ!？」

痴女先輩の申し出を食い気味にぶったぎった。ついでに、驚く痴女先輩にここで一矢報いてやろうじゃないか。

「聞こえなかった様なのでもう一度言います。理子先輩との戦妹契約はお断り致します。」

そう言い放った俺を見て、痴女先輩は目を見開き顔を伏せた。俺はその様子を見て幾分溜飲が下げられた気分だった。だから、気がつかなかった。伏せられた彼女の口が三日月形に歪んでいることに。

『ザッ…ザザッ…』

「？」

なんだ、今の音？どこからだ？

『いやああああ——！！！！！！！！！！』

「！！！！」

悲鳴っ！どこだ！？一体どこから聞こえて来た！

辺りを見渡すが何も見当たらない。そうやって、混乱する俺の耳に予想外の言葉が飛び込んできた。

『イヤ、いやあ！！乱暴しないでっ！！こんな恥ずかしい色の下着なんて見ないでえええ————！！！！！！！！！！』

『こんな時にも、下着の色の方が気になっちまうなんてなあ！！』

『そんなあ…ヤメテよお…そんなところ見ないでよお…もう…やめてえ…うえ……うう…』

『ローアングルのサービスありがとなあ!!』

「なん…だと。」

間違いなくこの声は俺の声。完全に嵌められた。俺は今まで目の前が真っ暗になるなんてことを信じてなかったが、どうやら本当だったことがここに証明された。

「ぶんぶん！誰だろーね！！女の子にこんなヒドイことするなんて！」

痴女先輩の声が遠く聞こえる。まるで、水の中にいるみたいに相手の声がくぐもって聞こえる。

「ねえねえ、どうしたのののん♪顔色がすっごく悪いよお。あ！もしかして何か心当たりあるのかなあ？」

目の前には、妖しい笑いを浮かべた痴女先輩と顔面蒼白で立ち尽くす俺。こうなることは最初から決まっていたのというのだろうか？だとしたら、あまりに残酷すぎると言わざるを得ない。

「……………理子先輩。」

「なあに？」

「俺を、是非、先輩の戦妹にして頂けないでしょうか？お願いします……！」

「そこまで言うならしょうがないなあ。ののんを理子の戦妹に

してあげようじゃないか」

これ以上無いくらいの見事な土下座と共に俺は痴女先輩、もとい理子先輩様の戦妹になることを誓わされたのだった。

めでたくない。めでたくない。

+++++

社会的立場の抹殺を逃れた俺は、寮に戻って鍋パーティーの準備中。

午後の授業は自主休校と相成った。というより、精神力が持たないため欠席した。

さらに、「理子も鍋パーティーに呼んでね」なんてメールがきて、絶賛ヤル気下降中だがやらないわけにはいかない。

というか何で知ってるんだよ、今日の鍋パーティーのこと。そんな大々的に告知なんかしてないぞ。

「はあ…。それに、あのどこで俺のアドレス知ったんだよ…。」

さっきのボイスレコーダーの件といい、情報戦能力が高すぎる。

いや、それだけじゃない。通常の戦闘能力の高さも、あの夜に確認済みだ。

「はあ…。やっかいな人に目をつけられたなあ。」

二度目のため息をつきながら、買ってきた鮭の切り身を軽く叩いて解す。今回の鍋は、獅童のリクエストで石狩鍋だ。俺も好きな鍋なので、美味しいものを作って少しでもこの憂鬱を晴らすとしよう。

そんなことを考えながら、解した鮭に切れ目を入れてみると、リビングに置いてあった携帯が鳴り出した。

「まさか、また理子先輩様からじゃないよな？」

若干の恐怖を感じながら携帯を取りに向かう。着信は…と、獅童からか。俺は安堵して通話ボタンを押した。

「はいよー。」

『おう！すまん、準備中に。』

「いいつて。気にすんなよ。で、どうした？」

『ちよつと人が増えそうなんだがイケるか？』

「後、何人ぐらいだ？」

『二人だ。』

「増えたな。なんかあったか？」

『……………まあ、な。で、どうだ？イケるか？』

なんか獅童のヤツ随分と齒切れが悪いな。けど、俺も急に理子先輩を追加しちゃったし、理由も詳しいことは言っていないから、それを追及するのは野暮ってもんだろ。

「俺の方も突然一人増やしたし大丈夫だ。ただ、食材が足らなそうだから、そっちで追加して買ってきてくれ。」

『了解。んじゃ、また後でな！』

「はいよ。」

通話を終えた携帯をソファに放り投げ、キッチンへと戻る。

「食材は獅童が追加で買ってきてくれるけど、米が足りないな。」

一旦、鍋の準備を止め、三合炊く予定だった米を五合に増やす。
こぎみよい音を立てながら米を研ぎ、炊飯器へと追加した。

初めは四人の予定だったが、なんやかんやあつて結局、全部で七人。しかも、来る人の半分以上を俺は知らない。

どう考えても普通の鍋パーティーにはならない。これは、予感じやなくて確信に近い。なぜなら、いつもは飯時に治まるはずの悪寒が、絶賛継続中だからだ。

「はあ…しょうがない。やるか。」

俺は幸せが逃げることも構わずに、本日三度目のため息をつき、
波乱の予感をひしひしと感じる鍋パーティーの準備を再開するのだ。
った。

+++++

「…なんでアンタがここにいんのよ。」

「それはあ、理子もこのパーティーにお呼ばれたからですよ。」

「はあ！？ちょっとキンジ！これは、一体どーいうことよっ！？」

「んなもん、俺に言われたって分かる訳ないだろうがっ！」

「……なあ、間宮。あの二人って仲悪いのか？」

「まあ……良くは見えないよね、あはは……。」

「しかし、美味い。野々宮殿は料理が得意なのでござるな！」

「……そうかい。遠慮せずにどんどん食べてくれ。ははは……。」

現在、俺と獅童の部屋で鍋パーティーを開催中。面子は、上から順に神崎先輩、理子先輩、遠山先輩、神崎先輩の戦妹で強襲課の間宮あかり（まみやあかり）、獅童、遠山先輩の戦妹で諜報課の風魔陽菜、俺の計七人だ。

ご覧の通り、一触即発の空気を醸し出す二人の先輩と、それに巻き込まれる先輩。そんな二人を遠巻きに心配する後輩と鍋を楽しむ後輩といった感じで、思い思いにこのパーティーを楽しんでいるみたいだ。

「鮭もーらい♪」

「ちよっ理子！それはアタシのよ！返しなさい！！！」

「キヤー、こわ〜い。キーくん、アリアが理子をイジめるよ〜。」

「

「おい理子！あんまくつつくな！アリアも落ち着け！」

「うつさい！それにキンジもデレデレすんなっ！………風穴開けられたいの？」

「待った！待った！ここで銃はやバイですって神崎先輩！」

「アリア先輩落ち着いて下さいっ！」

「野々宮殿、ご飯のおかわりを頂きたいのだが宜しいか？」

「……………分かった。よそつてくるから待っててくれ。」

もうここまできたら諦めるほうが楽だ。のっけからこの調子だし、今さら、どうしてこうなった？なんて考えるほうが余計に疲れる。それと風魔、お前食いすぎだからな。

風魔のリクエストに応えるために、リビングという名の戦場を後にし、キッチンへと向かう。

まあ、あそこから離れられるのは俺にとっても好都合だ。そう思いながら、ご飯をよそっていると、背後から声がかけられた。

「野々宮。どうしてこうなった？」

「それはこっちが聞きたいですよ、遠山先輩。」

肩を落としヤレヤレといった様子の遠山先輩に、俺は同じ仕草で応じた。

遠山先輩はそんな俺をジト目で睨んできたが、俺が心底疲れきった表情になっているのに気が付き、向けられる視線が同情の色を含むものになった。

ご理解頂けたようで何よりだ。それと、折角の機会だから遠山先輩に言っておくことにしよう。

「そういえば先輩。先輩に謝らなければいけないことがあったん

でした。」

「お前が俺にか？なんだよ？」

「忠告してもらったのに、それを守れなくてすみませんでした。」

「忠告？」

「先輩の言う通り、空から降ってくる女の子に録な人はいませんでした。……………結果はご覧の通りです。」

「理子が空から？……………なあ、野々宮、それはいつ頃だ？」

「先輩は飛行機のハイジャックがあつたのを覚えてますか？その日なんです。」

あの日、夕食の買い出しに行ったことは忘れられないものになった。

なぜなら、あそこから俺の人生の歯車が変な音を立てて勢いよく回り始めたのだから。

そんな感慨に浸りつつ、遠い目をする俺を見て、遠山先輩はバツが悪そうに目を逸らした。

「……………そうか。すまなかったな、野々宮。」

「え？なんですか？」

「何でもない。こつちの話だ。」

「？」

先輩が何か言っただけで聞こえなかった。でも、表情から察するに、俺に負い目を感じてるみたいだ。なぜかはさっぱり分からないが。

「それとも一つあるんですよ。聞いてもらえますか？」

「ま、まだあるのか？なんだよ？」

「嘘に聞こえるかもしれないですけど、俺、先輩の忠告を聞かなかったこと後悔してませんよ。そりゃ迷惑極まりないし、正直メンドクサイ人関わっちゃたなーとは思いますが。」

でもね、遠山先輩。俺、知ってるんですよ。屋上で会ったあの日、神崎先輩に絡まれ、無理矢理連れていかれる遠山先輩の顔が笑っていたこと。

俺にはそれが眩しく見えたし羨ましかった。遠山先輩はきっと認めないだろうけど、とても充実したい表情だった。

「どうせ武偵になったら、嫌でもトラブルに巻き込まれるわけですし、今の内から経験しとけば本番で失敗することもなくなりますね。」

日常から非日常へ。ノンフィクションからフィクションの世界へ。俺はきつとそんな世界へ飛び込むキツカケを望んでいたんだと思う。

それが、たまたま、空から女の子が降ってくるっていう普通ならあり得ないシチュエーションだったという話。

「だから、先輩には感謝してるんです。貴重な機会を逃さない為

のアドバイス、ありがとうございます。」

「皮肉にしか聞こえないんだが？」

「そんなことはありませんよ？なんなら土下座でもしましょうか？」

「ホント、食えないヤツだよ、お前は。」

「お褒めに預り恐悦至極。」

「だーかーらー！褒めてねえ！！」

自分でも困ったヤツだって自覚はある。好きで厄介事を背負ってるわけじゃないし、向こうからやってくるだけだ。

「なにになに？二人して理子に内緒で何の話してたの？」

なら、その厄介事を楽しんできたほうがいいに決まってる。

そして、相方が美少女なら文句のつけようもない。

「いえ、二人で理子先輩と神崎先輩のどっちがかわいいか勝負してたところですよ。」

「ちよっ、おまつ、何言ってるんだ！」

「~~~~~！！！！バカキンジ！！」

顔を真っ赤にした神崎先輩と悪い笑顔を浮かべる理子先輩。

「くふっ そーなんだあ。ねえねえ、結果はどっちの勝ち？」

「俺の勝ちです。俺が理子先輩のかわいいところを十八個挙げた時点で、遠山先輩がギブアップしましたから。」

理子先輩との一瞬のアイコンタクト後、俺はさらなる爆弾を投下した。

「だからお前は どうしてそういうテキトーことを！！って、ひっ！！」

あれは、ビビっても仕方ない。なんてつつたつて顔を伏せた神崎先輩から、尋常じゃないくらい黒いオーラが噴き出しているんだもの。

「ねえ、キンジ？アタシが理子に負けたってどういうことかしら？」

「だから、それは誤解だ！第一そんな勝負はしてないんだよ！」

「ねえ、のののん。負け惜しみってカッコ悪いよね？」

「全くです。男らしさの欠片もない。武偵の風上にもおけませんね。」

「お・前・らー！ー！！！！」

「風穴っ！風穴っ！風穴あー！！！！」

そして、遠山先輩と神崎先輩の命懸けの追いかけっこが始まった。神崎先輩には出来れば発砲しなくてもいいが、あの様子じゃ無理だな。

あーあ。後片付けがメンドクサそうだ。まあ、獅童に手伝わせれ

ばいいか。

「のののんって案外腹黒だね」

二人が追いかけてこを始めたのを見計らって、理子先輩が声をかけてきた。

心外だ。俺が腹黒なんだとしたら、理子先輩は一体なんなんだと言いたくなるが、グツと我慢。

オトナゲがないのは某バスケット小説の主人公だけで充分だ。

「そんなことないですよ。もし、そう思ったのなら、それは戦妹の影響じゃないですかね？ほら、弟子は師匠に似るって言うじゃないですか。」

「ふーん。そーいうこと言うんだ。理子はあ、あの日の続きをここでやったっていいんだよ？」

理子先輩から殺気が膨れ上がり、俺の首筋がピリピリし出す。以前言ったことを撤回しなければならぬ。俺はMじゃないと言ったが、どうやら違ったらしい。

なぜなら、身もすくむ様な殺気を浴びせられているのに、ワクワクが止まらないからだ。

だから、俺はさらなる興奮を求めて、自ら地雷を踏み抜いた。

「どうせ、アンタには俺は捕まえられるよ。そうだろ？痴女先輩？」

「いい度胸だチキン野郎。捕まえて、バラバラにしてやんよ」

笑い合う二人の影が交錯する。こうして鍋パーティーは第二ラウ

ンドへと突入した。

何か忘れてる気がするが気のせいだろう。こんなに楽しい状況に比べれば、きつと些細な事に決まってる。

「野々宮殿ー！ご飯はまだでござるかー！」

あ、そうだった。というか、風魔。お前食い過ぎだからな。

+++++

獅童を叩き起こすことから俺の朝は始まる。そして、朝食を用意して、一緒に武偵校まで行く。

後は授業を受け、昼飯を食べ、専門課程やクエストをこなして帰宅。

夕食を作って、部屋でゆっくりと過ごして時間が来たら、明日に備えて就寝する。これが、今までの俺の日常だった。

「朝から誰だよ？」

朝食の準備の最中に携帯が鳴る。確認するとメールが一件。送信者は理子先輩だ。

果てしなく嫌な予感しかないが、開かないで地獄を見るよりは、開いて先に地獄を見たほうがいい。

『本日とっても大事なお話があるのでお昼は屋上にしゅーごー♪
遅れたら、がおーだぞ！』

「はあ……………」

また、なんか面倒なこと始めようとしてるな、あの痴女先輩は。

あの人の『大事なお話』に関わると碌なことが無い。

「ん？まだ続きがあるな。」

まだ画面がスクロール出来ることに気が付いた俺は、先を見ることにした。毒を喰らわば皿までだ。

『追伸！ののんは理子に美味しい美味しいサンドイッチを用意してくるよーに（*^・^・）b』

「……………」

OK。冷静になれ、俺。あの痴女のワガママはいつも通りじゃないか。何を怒る必要がある。

俺はアイツと違って大人なんだ。こんなことにいちいち目くじらを立ててられるか。

そう思った矢先にメールが届く。俺は無言でそれを開いた。

『理子は玉子サンドをご所望です（つ、、）つ』

「知るかつ！……！」

あまりの理不尽さに思わず携帯をソファーへ叩き付けた時、のっそりと獅童がリビングへと姿を表した。

「ふあゝ。おはようさん、野々宮って、うお！？朝から荒れてんな？。」

「ああ、おはよう。すまん、いつものだ。」

「そつか。お前も大変だな。とりあえず顔洗ってくるわ。」

「分かった。飯は用意できてるから早くしろよ。」

背を向け手をヒラヒラ振りながら応える獅童を見送り、俺は朝食の準備を終えたばかりのキッチンに再び立った。

それは、これから玉子サンドを作る為だ。勘違いしないで欲しいのは、俺が好きであの痴女に作っているわけではないということだ。一度すっぱかしたら、校内放送であのボイスレコーダーを流されそうになったので、背に腹は代えられない。

「おい。飯にしょーぜー？」

「先に食ってくれ。俺はもう一仕事しなきゃならなかった。」

「あいよー。んじゃ、いただきまーす！」

今の俺の日常は少し前と大分変わった。

あの日、あの場所でアイツと出会ってから、朝から晩まで厄介事のオンパレード。息つく暇なんてありはしない。

そして、今日もまた何かしらのトラブルに巻き込まれるんだろう。背筋に走る悪寒は今日も絶好調だ。

「はやまったかもしれないなあ……。」「

そうボヤク俺の所に朝食を下げに獅童がやって来た。

「なに朝からブツブツ言いながら、ニヤケてんだよお前は。こころんといつもそうじゃねえか。」

どうやらブツブツ言いながら俺はニヤケていたらしい。そんな、バカな。

「ま、お前が楽しそうで何よりだわ。」

「…今の俺のどこが楽しそうに見えるんだよ。」

「じゃあ、そういうことにしといてやるよ。待ってるから、さっさと済ませろよ。」

獅童の言う通り、俺は今の日常を悪くないと思ってるし、フィクションみたいな刺激的な日常を送りたいと思っていた。

でも、何だろうか？漠然として上手く言えないが、こう関わっちゃいけないものに関わってしまったという感じがする。

まあ、気にしていても仕方ない。目の前の玉子サンドという問題をさっさと片付けるとするか。

「おーい。まだかー？」

「すまん。ちょっと時間かかりそうだから先に行ってくれー。」

「了解。んじゃ、学校でなー。」

獅童を送り出して、調理を開始する。材料はそろっているからあつという間だった。

「これでよしつと。」

自前のランチボックスに詰めて完成だ。

これなら獅童と一緒に出られたかもしれないと思ったが、先に行

かせてしまったものは仕方がない。

「しゃーない。ゆっくり行くとしますか。」

そして、俺は平穩から一変してしまった日常へと肩を竦め、今日も歩き出したのだった。

おっと、忘れる所だった。これは、余談なんだが俺が朝に感じた漠然とした予感¹は正しかったことを付け加えておく。

まさか、呼び出された屋上で、理子先輩に遠山先輩と神崎先輩と一緒に、曰く付きホームヘルパーの仕事²をさせられることになり、拳げ句の果てに伝説の吸血鬼と殺り合うことになるなんて、この時、俺は思いもしなかった。

t o b e c o n t i n u e d ?

（後書き）

お疲れ様です。楽しんで頂けたでしょうか？

久々なのでとても緊張しました。

ご意見や感想お待ちしておりますので、宜しくお願い致します。

御一読、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9459x/>

戦妹協定は脅迫ではない

2011年10月26日17時25分発行